
ニンギョヒメ

しろつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ニンギョヒメ

【Nコード】

N5375P

【作者名】

しろつき

【あらすじ】

雨の降りしきる梅雨。

藍く色づいた紫陽花の咲くうら庭に、ぽつりと人魚姫はいた。

彼女が引き換えにした素敵なものは何だろう。

言葉なのか、こころなのか。

それは誰にも分らない。

雨は静かに、彼女のこころをさらさら流してゆく。

ープロローグー

雨の降りしきる梅雨、青く色づいた紫陽花の咲くうら庭。
ぽつんと人魚姫はいた。

滝のように降る水で全身を濡らし、呆然と立ちつくして。

声をだすことなく。

誰かを待っているわけでもなく。

ずっと、ずっと。

辛抱強く王子さまを想っている。

彼女が引き換えにした素敵なものは何だろう。

言葉なのか。

心なのか。

それは誰にもわからない。

彼女だけが知っている。

だから彼女の心があふれても、誰に気づかれることはない。

空から落ちてくる水とほおを伝う水は、まったく同じなのだから。

水は重く、冷たく打ちつける。

人魚姫の心を、さらさらさら跡形もなく、洗い流すまで。

ープロローグー（後書き）

童話になぞらえてみたお話です。
楽しんでいただければ、幸いです。

〓ニンギョヒメ〓1 (前書き)

第一話です。

「ニンギョヒメ」1

・雨のお姫さま

カレンダーは夏の暑さが始まる六月。空全体を鼠色の重たそうな雲がどんよりと覆っていく頃、梅雨の空模様。

今日は朝からぼつぼつ弱い雨が振っていた。

家を出る前に見た天気予報によると、一週間のうち五日間は雨の日が続くとのこと。

お天気お姉さんが、梅雨入りの発表をしていたのをわたしは覚えてる。ついに来てしまったのだ。

梅雨という季節が。

この時期になると、梅雨だからって雨ばかり降らさなくても良いのに、と私は思うようになる。

朝から雨が降ると、その日は憂鬱な気分が始まるから。

梅雨は、陰湿な湿気が肌に纏わりついて嫌だ。

髪をセットしても、なかなか言うことを聞いてくれないのが嫌。

雨が降った日の電車なんて、もう最悪。

狭い車内に押し込まれた上、隣の人との密着度が半端じゃない。

みんな濡れた傘を持っているから当然のように服は濡らされるし、ベタベタした他人の肌と自分の肌が触れてしまったときなんて、あとにも続く気持ち悪さ。

湿気のおかげで肌が乾燥しないのは嬉しいけれど、嫌なことがあまりに多すぎる。

だからこの梅雨の六月という季節が、私は好きじゃない。たぶん、嫌いと言ってもいいくらい。

「はあ」

ほら。こんな風に自分でも驚くくらいの大きなため息だって、すんなり出せる。

もう、ほんとうに最悪なんだから。

こんな天気は早く終わって、夏の空になってくれないかな。湿気が消えて、気持ちのいい天気になって欲しいな。

それが、目下私の願うことだった。

自分勝手なのはわかってる。

けど、お願いするくらいはさせて欲しい。

「よし。これでいいかな」

駅のトイレに入り、私は鏡を見ながらせっせと髪を整えた。

直しても、髪がすぐにふわっと浮いてくるけど、これはもう直しようがない。

全体的に見て不自然でなければ、今日はそういう髪型にセットしたということなのだ。

そんな言い訳を自分自身によく言い聞かせながら、私は学校に向かった。

くニンギョヒメく2 (前書き)

1の続きです。

〱ニンギョヒメ〱2

授業の終わりを告げる鐘がなる。

雨が降っている所為か、放課後に私が当番の仕事を片付けた頃には、校舎に人はまばらになっていた。

「まだ降ってるんだ……」

空を覆い隠す雨雲は、午後になっても一向に無くなる気配がなかった。

むしろ雨足は朝よりも強くなっている様子だ。

「さっさと帰ろう」

特に用事もなかった私は、傘を広げると早足で家に向かい歩き出した。

「え」

どきっとして、私は一瞬、自分の目を疑った。

帰ろうと歩き出した矢先に、不思議な光景が視界に入ったのだ。

深い青を魅せる紫陽花の咲く庭から、人の足が覗いている。

うそ。人が倒れてるの？

瞬間的に、頭の中で一度にたくさんの考えが爆発した。

嫌なことは考えたくないけれど、もしかしたら……があるかもしれない。

こんなこと普通じゃないし。

そう考える同時に頭の中が真っ白になって、私の足は庭に向かい走り出していた。

雨に濡れることが嫌だったはずなのに、もうお構いなしで。

「あれ……」

見えた足に近づいたところで、やっと顔が見えた。

女の子だった。

それも私が知っている顔。

たしか同じクラスの水沢さん……だよ。

紫陽花に囲まれる形で、水沢さんは横になっていた。

雨に濡れて首や肩にぴったり貼りついた髪に、濃い藍色のジャージから細い腕を伸ばして。

まるで童話とかの物語に出て来そうな、お姫さまといった感じがする。

だけど、今はそんなことよりも先に。

「あの、大丈夫？」

もう一度、雨にかき消されないように私は声をかけた。

くニンギョビメくくく(前書き)

前回の続きです

「ニンギョヒメ」3」

「うん？」

倒れていた水沢さんは、ゆっくりと目を開け答えた。

「どうやら、気分が悪くて倒れていたとかそういうことじゃないみたい。」

「ああ、よかった。」

「なんでこんな所にいるの？」

私は当たり前のように気になっていた疑問を、彼女へとぶつける。

「なんでかな。こうしてると水の中に居るみたいでさ、安心するんだあー」

「水の中？」

「そう。わたしは、人魚姫だから」

「へえ……」

一瞬、水沢さんの表情はどこか無理をしているように見えた。自分の感情を、嘘で覆ってしまっているみたいな感じだ。

「あ、その顔は信じてないな。言ってることは本当だよ」

「どういう意味？」

いきなりお話の中に登場する人魚姫だと言われても、私にはさっぱり意味がわからなかった。

「なんだか、さっきから分からないことばかりだ。」

「うーん。叶わない恋をしてるから、かな？」

「えっ？」

「なんてね。私って、ロマンチストだから」

水沢さんの言葉はどこまでが本場で、どこからが嘘なんだろう。

私はそう思わずにいられなかった。

彼女の言葉には強く感情が乗っていたから。

「さてと、そろそろ帰るね。今日は部活も無いし」

「あ、うん……」

「それじゃあね、今川さん」

そう言うと水沢さんはすっと立ち上がり、校舎の方へと走ってつていった。

くニンギョヒメく4(前書き)

3の続きです

「ニンギョヒメ」4

「よっちゃんさ、朝から雨って何でだろう……」

窓の外は、昨日から変わらず同じような景色だった。

「梅雨の季節だからねー」

私の愚痴に対して、前の席から間延びした女の声が返ってくる。

「よっちゃんさ、叶わない恋って何だろう……」

「なんだろうねー……、えっ？」

目をぱちくりとさせ、彼女は言葉を失って固まった。私の聞いたことがそんなに以外だったんだろうか。

「まさかみゆきの口からそんな言葉が出るなんて、思わなかった」
彼女は本当に驚いた様子だった。

「私のことどう思ってるの。それよりさ、どう思うの？」

「それは相手に好きな人がいる、とかが一般的じゃないのかな」

「ふーん……」

自分が好きな人にはもう好きな相手がいる。

一方通行の恋。

だから水沢さんは、自分のことを人魚姫だと言ったんだろうか。

すむ世界が違うのに、交わるはずがなかったのに、王子に恋心を抱いてしまった人魚のお姫さま。

私は視線を、教室の前にいる水沢さんへと移した。

「どんな感じなんだろう」

水沢さんは可愛いくて性格も明るい。

このクラスで役員をやっているし、水泳部では部長も勤めていたと思う。

責任感がある上に、頭もいいと来たものだから男女の両方に人気

がある。

そんな彼女だったなら、相手がいても奪えるんじゃないだろうか。

「叶わない恋ね……」

「え、なにに？　もしかして興味あるの」

「いや。なんでもないよ」

なんにせよ、水沢さんは相手のことが本気で好きなんだろう。そう思うとなんだか羨ましい、かな。

私じゃきつと、そんな気持ちにはなれないから。

くニンギョヒメく5 (前書き)

4の続きです。

〓ニンギョヒメ〓5

ぼうっと考え事をしていると教室の扉が、音を立てて勢い良く開いた。

「ほら早く席に着けー」

いつもより少し早く、先生が教室に入ってきた。

「センサー、まだ時間ありますよ」

「チャイムなってからじゃ遅いだろう。ほらっ」

「あ……」

ぽんっと軽く、先生はからかうような声を出した水沢さんの頭を叩く。

そして、周りの子たちに対しても『ほら、早く席に戻れよ』と気だるそうな声で席に帰させた。

「ん？ どうした」

先生は、神妙な顔をして水沢さんに声をかけた。

「あ、いえ。なんでもない……です」

水沢さんは顔を赤くさせていた。

声は小さく、私の席が前だったことでどうにか聞き取れる程度の小声。

なるほど、そういうことなのか。

もしかすると私は、人魚姫が恋する王子さまを見つけてしまったのかもしれない。

「それじゃあ、授業始めるぞー」

先生が教卓の前に立つと、時間を計ったかのようにチャイムが鳴り、いつも通り授業は始まった。

内容がそれほど難しくなかったのが手伝ってか、授業中私はずっ

と先生と水沢さんのことばかりを考えてしまっていた。

〓ニンギョヒメ〓6(終)(前書き)

5の続きです。

〓ニンギョヒメ〓6（終）

放課後、教室から水沢さんが居なくなったのを確認すると、私は水沢さんを見つけた紫陽花の庭へと向かった。

王子さまが先生なのかを確かめたくて。

「ん。どうしたの？」

庭に行くと、この前と同じように水沢さんは横になっていた。

「あの、さ……」

私は傘を持ったままその場へとしゃがみ込む。

周りに誰も居ないけれど、こういう事は小声で言わないといけな
い気がした。

「水沢さんの好きな人って近藤先生？」

「わあっ!？」

水沢さんは裏返った声を出すと、もの凄い勢いで起き上がった。

ちいさな口は『わ』の形で固まったまま、長い睫毛をぱちぱちさ
せる。

「へえ、やっぱりそうなんだ」

「あ……、えっ。なんでっ？」

私に知られたのが本当に意外だったんだろう。

水沢さんは頬を真っ赤に染めて、不思議そうな顔をしている。

「なんとなくだけど、見てたら」

そう。なんとなく、なのだ。

私自身、絶対にそうだ！とは思えなかった。

もしかすると程度にしか分からなかったのだ。
だからこそ、こうして確かめに来た。

「……変、だよ。こんなの」

「そんなことない。変じゃない」

どんな形であれ、強く想える相手がいるのは羨ましい。
なにより、恋。

それが出来るだけでもう、私にとっては凄いことだと思える。
そう思う私こそ、変なのかもしれないけれど。

「あはは。優しいね、今川さんって」

そんなこと、ない。

私はただ本当のことを言っただけで、羨ましいと思ったただけなの
に。

「良かったら私に、応援させてくれない……？」

「えっ」

「水沢さんの恋」

さすがに変すぎるだろうか。

勝手に人の恋を応援させて欲しいだなんて。

「なんで、わざわざ応援してくれるの？」

「恋をしてる水沢さんが、すごく綺麗だったから」

私は思ったことをそのまま言った。

この健気な人魚姫を放っておく訳にはいかない。

彼女の恋心を、泡になんてさせてやるものか。

「本当に、優しいんだね。ありがとう……今川さん」

「みゆきでいいよ。私の名前」

一瞬、きよとした顔を水沢さんはする。

でも、すぐにその表情は変わり、

「うん。みゆき」

逆に私が恥ずかしくなるような、とびっきりの明るい笑顔を見せて
てくれた。

カレンダーは夏の暑さが始まっている六月。
空全体を鼠色の重たそうな雲がどんよりと覆っている、雨の空模様。

私は梅雨の季節もちょっとは良いなと思う。

雨の季節は庭に行くと、人魚姫に逢えるのだから。

くおわりく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5375p/>

ニンギョヒメ

2011年10月6日23時36分発行